

## 糖尿病センター

### 1. スタッフ

センター長（兼）（内分泌代謝科教授）石橋 俊

#### 内分泌代謝科

講師（兼）長坂昌一郎  
野牛 宏晃  
大須賀淳一

助 教（兼）草鹿 育代  
岡田 健太  
安藤 明彦

病院助教（兼）岡田 修和  
高橋 仁麗  
齋藤奈緒子  
出口亜希子

シニアレジデント（兼）3名

#### 腎臓内科

教授（兼）草野 英二  
特命教授（兼）武藤 重明  
学内教授（兼）安藤 康宏  
竹村 文美

学内准教授（兼）濱野 慶朋  
講 師（兼）齋藤 修

学内講師（兼）秋元 哲  
助 教（兼）森下 義幸  
病院助教（兼）西野 克彦

小藤田 篤  
風間 逸郎  
岩津 好隆  
加藤 真紀

シニアレジデント（兼）3名

#### 眼科

教授 佐藤 幸裕

教授（兼）茨木 信博

准教授（兼）小幡 博人

講師（兼）牧野 伸二

学内講師（兼）国松 志保

助 教（兼）杉 紀人

堀 秀行

病院助教（兼）竹澤美貴子

青木 由紀

石崎こずえ

シニアレジデント（兼）3名

### 2. 糖尿病センターの特徴

平成21年4月に糖尿病センターが発足するとともに、佐藤幸裕が糖尿病センター教授として赴任した。単純網膜症から発症する糖尿病黄斑浮腫の治療、前増殖網膜症に対する選択的光凝固による増殖網膜症への進行阻止、増殖網膜症に対する光凝固や硝子体手術による失明防止など、糖尿病網膜症の軽症例から最重症例までを適切に管理できるシステム確立をめざしている。

同4月馬場千恵子看護師長が糖尿病療養指導の専門外来（さかえ外来）を開設した。同4月に栄養部に佐藤敏子室長が加わった。内分泌代謝科、腎臓内科、眼科、看護部、栄養部のスタッフで運営委員会を組織し、糖尿病合同カンファランスを開講している。

### 3. 実績・クリニカルインディケーター

平成21年度（1月～12月）の実績は下記の通りである。

内分泌代謝科に入院した糖尿病患者は入院662名中486名だった。1型糖尿病59例、2型糖尿病418例、その他9例で、急性合併症21例、妊娠合併例10例、足病変9例だった。

腎臓内科に入院した糖尿病性腎症患者は入院491名中109名だった。

病期分類別では、糖尿病性腎症第4期（腎不全期）が48名で最も多く、第5期（透析療法期）が45名と2番目に多く、第2～3期が16名と続いている。

糖尿病性腎症の透析導入が一番多く、教育入院やネフローゼの治療も多く見られた。

腎生検にて糖尿病性腎症と診断した症例は全腎生検症例127名中4名だったが、腎生検施行理由は糖尿病性腎症以外の腎疾患が考えられたためである。

平成21年4月から12月までに実施された糖尿病網膜症に対する硝子体手術は約130件であった。40歳未満の若年者が20%以上を占め、他の施設に比較して若年の重症例が多く、患者教育を含めたケアが必要と思われる。

#### 糖尿病センター合同カンファランス

4月30日	糖尿病網膜症
7月8日	糖尿病腎症
9月11日	足壊疽・フットケア
12月4日	肥満症のチーム医療
2月18日	入院患者さんにおけるインスリン治療

合同カンファランスでは毎回アンケートを実施し、テーマを選定している。可能な限り症例中心とし、多部門からの提言促進するパネルディスカッションや、院外

からの招待講演を設け、院内外でのネットワークと診療コンセンサスの形成を目指している。

#### 4. 事業計画・来年の目標等

センター全体としては、引き続き定期的に合同カンファランスを実施し、診療の連携を密にし、コンセンサスが不十分な診療領域にはマニュアルを作成して対応する。地域に潜在的に存在する患者数を考慮すると、地域との連携も不可欠であり、自治体や医師会と協力して、医療体制構築を行う。

網膜症を適切に管理できるシステムの確立には、定期的な眼底検査が必須であるが、眼科外来の混雑が大きな障害になっている。眼科外来を受診しなくても評価が可能な、無散瞳眼底カメラによる眼底検査システムの導入を具体的に検討していきたい。